浄土真宗立教開宗八百年
慶讃法要次第

一、喚鐘
　喚鐘中、新制御本典作法より念仏伽陀・総序（難しいので聞くだけ）
一、礼讃文
一、正信念仏偈（草譜）
　和讃
　「弥陀成仏のこのかたは」以下六首引
一、本典後序の文（下参照）

総序（『顕浄土真実教行証文類』）

ああ　弘誓の強縁
多生にも値ひがたく
眞実の淨信
億劫にも獲がたし
たまたま行信を獲ば
遠く宿縁を慶べ

念佛伽陀　合曲　出音　商　黄鐘調

南无阿弥陀佛

【本典後序の文】

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。（略）

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これによりて、真宗の詮を鈔し、浄土の要を摭ふ。ただ仏恩の深きことを念うて、人倫の嘲りを恥ぢず。もしこの書を見聞せんもの、信順を因とし、疑謗を縁として、信楽を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。

【現代語訳】

そこで私こと、愚禿なる釈の親鸞は、建仁辛酉の暦（一二〇一年・親鸞聖人二十九歳）、それまで修めていた雑行を捨てて本願の世界に帰入しました。（略）

よろこばしいことに、いま私は心を阿弥陀仏の本願の大地にたて、思いを不可思議なる仏法の海に浮かべています。阿弥陀仏の慈愛の深さを知り、先師の方々の恩徳の厚さを仰いで、その喜びはいよいよこの上なく大きく、師の教恩をますます重く感じています。そこでいまここに、浄土真宗の眼目を選び、浄土の教えの要を集めました。そのことは、ただひとえに仏の御恩の深いことを思ってこそしたことで、世間の人々からいかなる非難をうけようとも恥じるものではありません。もしもこの書（『顕浄土真実教行証文類』）を見聞きする人があれば、信じ順（したが）おうとも、またこれを非難し、否定しようとも、そのことを因とし、また縁として、ついには阿弥陀仏の本願を信知し、ともに安養の浄土に往生成仏したいと思っています。